

開催日時：平成23年10月14日（金）19:00～21:00

開催場所：秋葉原 UDX 4F UDX オープンカレッジ

参加人数：参加者数:24名

【会議概要】

これまでの復興国際博覧会構想会議の中で、これから当部会が目指す方向性が定まってきた。期間や場所を限定するものではなく、復興のための技術やアイデア活動そのものを国際博覧会の一部とする、世界への情報発信、世界からの参加を目的とした国際博覧会。企業のCSR活動や本業を通じた支援活動や復興施設、PPPやPFIによる民間の協力による公共事業、ソーシャルビジネス、コミュニティビジネスの創出による復興と地域復興、NPOやボランティア活動、プロボノ、義捐金や支援金などの寄付の効果的投資システムなどのソーシャルイノベーションをテーマとした世界初の博覧会と位置づけ、復興の過程や成果を発表していくことをコンセプトにしている。

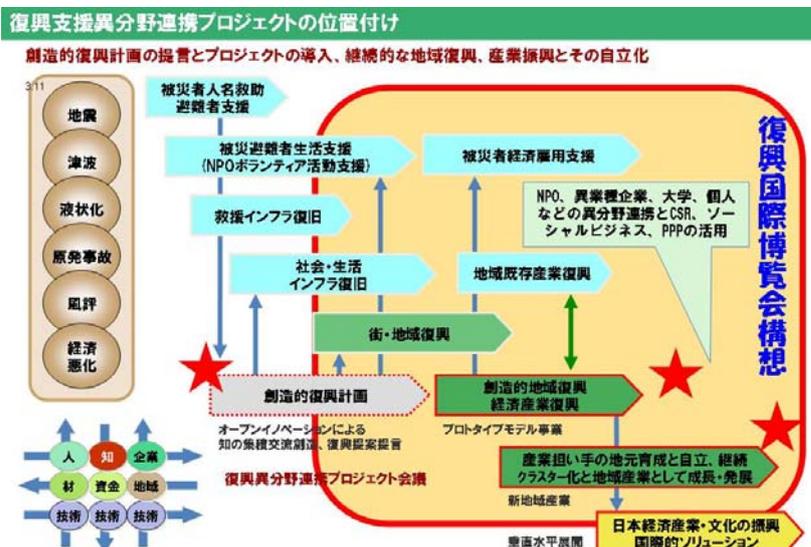
今回の会議では、新産業文化創出研究所の廣常啓一より、上述した趣旨に基づく提言が行われたほか、株式会社コミュニケーション・デザイン研究所の福井昌平氏よりイベント学会の構想する復興国際博覧会「東北復興博覧会構想」研究を、そして東京観光専門学校 非常勤講師（福山大学客員教授）宮地克昌氏からは学生たちと15万円の予算で取り組む「東日本“花緑”復興プロジェクト「花譜」」をプレゼンテーションいただいた。

【プログラム】

■ 「新たな概念の博覧会のあり方の提言」

新産業文化創出研究所 所長 廣常啓一

1. NPO、異業種企業、大学、個人などの異分野連携とCSR、ソーシャルビジネス、PPPを活用した博覧会



2. バーチャルな復興国際博覧会

提言情報発信、バーチャルマッチングのためのポータルサイト

震災の被災者、被災地域支援の各種ソリューション、復旧、復興のための提案、提言

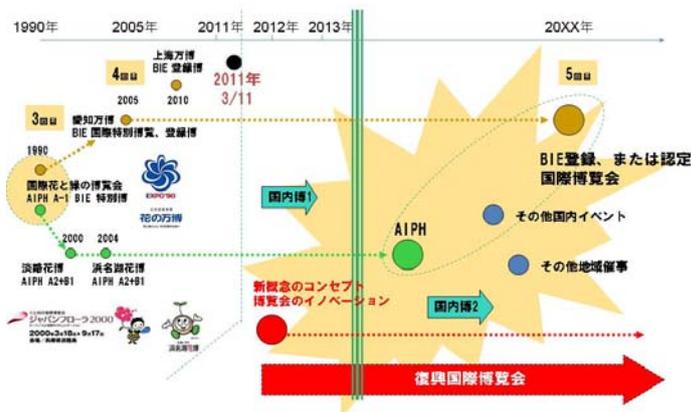
<http://www.icic.jp/project-1.html> (仮サイト)



3. 博覧会を組み合わせた開催

国内博覧会やAIPH認定の園芸博覧会などと組み合わせ、最終的にBIE登録を行うことによる国際博覧会を含めたトータルとしての復興国際博覧会

博覧会のBIE認定方法とAIPH組合せ



4. 見本市的博覧会

復興のための支援と関連する技術や活動、思いや成果、経済システムなど復興の見本市、復興活動や施設作り、そのものを博覧会活動として、世界に情報発信していく。

復興の見本市

国際博覧会は、各時代の国や企業、民族の技術や文化の**見本市**として目的が。

その時代時代で、世界にアピールするものが変化してきている。

世界の各地で災害、紛争があり、必ず**復興**が必要となる。

復興のための支援と関連する技術や活動、思いや成果、経済システムなど復興の見本市、復興活動や施設そのものを博覧会活動として世界に情報発信

5. 未来を共に目指す復興国際博覧会

「過去」：産業の衰退、高齢化社会など

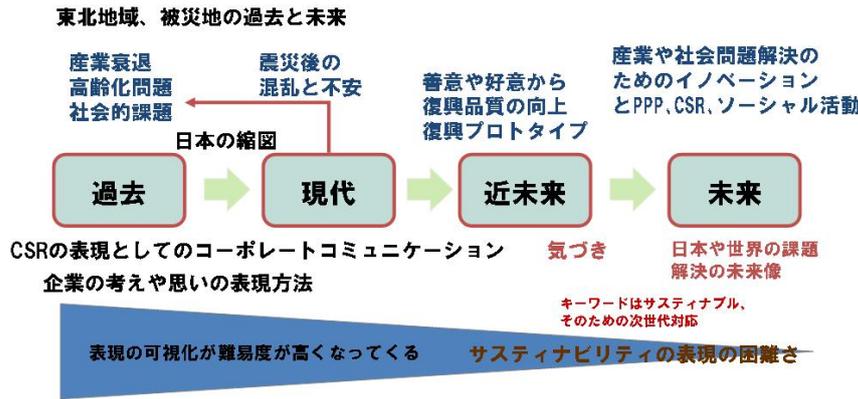
「現在」：震災後の混乱と不安が続く

「近未来」：民間、NPO、団体など様々な機関が入り、復興プロトタイプ作り

「未来」：社会問題解決のイノベーションを起こすことによって、東北、日本、世界の課題解決が見えてくる。

企業 CSR の表現の可視化は、未来へ行くに従って難しくなるが、復興国際博覧会という枠組みを通して未来を表現することにより、持続的な社会への表現を行うことができる。

被災地域の復興のイノベーションと企業CSR



CSRの広報、コーポレートコミュニケーションの難易度とイコールに

※NHKの「プロジェクトX」などは過去の企業活動を表現しているがCSRとして未来を想定するものになっていない

過去から現代の流れを理解させ、未来を推測させる方法、現代のR&Dやイノベーションのための取り組みにより未来を推測させる方法、未来の社会のイメージを表現し、企業の製品やサービス、活動との接点を表現する方法などがある。

6. 日本復興から世界へ目を向けて

全世界の災害や紛争の後の復興を支援するための博覧会組織へ

日本の復興から世界に目を向けて



全世界の災害や紛争の後の復興を支援するための博覧会組織へ

■「東北復興博覧会構想」研究 ～博覧会を活用した、復興・再生戦略のあり方～

発表者 株式会社コミュニケーション・デザイン研究所 福井昌平氏

共同研究者 那和真太郎氏（株式会社電通）

川西太士氏（株式会社博報堂）

金田秀一氏（株式会社 アサツー ディ・ケイ）

タイトルにもあるように、当研究は「博覧会の歴史的事業手法を活用し、東日本大震災被災地の復興に寄与する方法と戦略を研究」し、東北復興博覧会構想のモデル事業化の提案を目的としているという。

1. 復興・再生に大きな役割を果たしてきた過去の博覧会の効果

時代とともに、その時の博覧会の果たす意義や目的、手法は変化してきた。ジャポニズム・ブームを引き起こす博覧会からはじまり、近年では持続可能な社会発展に寄与する国内博覧会事業へ。大量集客誘引とともに、ビジョン実現、市民参画、社会資本整備、経済波及効果などがある。

2. 東北復興計画がめざすもの

それぞれの自治体、あるいは国が示す方向性を集約すると、大きく以下のように大別される。

- ① 食糧の宝庫、豊かな農林水産業
- ② 自然エネルギーの追及
- ③ 新しいエコやハイテク産業
- ④ 自然景観、人と自然の学び合い
- ⑤ 文化観光交流

3. 博覧会事業の経済的波及

1000億円規模の効果があり、開催シードマネーとしての国庫負担を100億円と想定すると、約10倍となる。

4. 東北復興に資する国際博覧会事業のモデルプラン化

- ① 国際花博の開催（AIPHの国際園芸博を想定）
テーマは「花による東北復興」
- ② ミラノ万博への「東北復興・再生」の積極的な組み込み
- ③ BIE認定国際博の開催（3か月開催のもの）
テーマは「地球エネルギーとの対話」

5. 今後の当研究テーマの推進方向

イベント学会における研究仲間の拡大と英知の終結、都市計画学会やランドスケープ学会等々の専門学会との連携、省庁へのヒアリングに基づく国のイニシアティブ形成に向けた政策提言を行い、2012年度中に東北復興博覧会構想が東北復興・再生プロセスの中に位置づけられるようなオピニオン形成に積極的に取り組む。

■「東日本“花緑”復興プロジェクト「花譜」

東京観光専門学校 非常勤講師（福山大学客員教授）宮地克昌氏

東京観光専門学校で教鞭をとる宮地氏は、学生たちとともに「花緑」をテーマにしたツーリズムに着目し、プロジェクトを開始。きっかけは、阪神淡路大震災で天皇皇后両陛下が被

災地を訪問されたときに水仙を手向けられ、今回の東日本大震災の時は被災者が皇后陛下に水仙をプレゼントしたことを受けて、多くの方が気軽に参加でき、被災者を元気づけることができ、多くの誘客を促すことのできると考えたことによるという

今年の秋に「国営みちのく杜の湖畔公園」に不死鳥の形に植えた水仙の球根は、来年の春に再び花となって不死鳥としてよみがえる。行方不明、亡くなられた方の数だけの球根（2万個）を植える。一発の原子爆弾の影響で「75年間は草木も生えない」といわれていた広島。街の復興は、緑の復興でもあったという。街並みを考えた計画的な「花緑」による復興をと、宮地氏から語られた。

【事務局より】

まずは facebook 上のワークショップ告知において、開催時間の間違いがあったことを心よりお詫び申し上げます。

ICIC 廣常からは、社会の課題を解決できるような博覧会ということが強調された。NPO の活動も企業 CSR の活動も、全て国際博覧会の一部という、復興のためのソーシャル活動自体を内包させることによって、モチベーションも高く、また復興のために活動をする参加者も多い、そして被災者にとってもきめ細やかな様々な取組みを行うことができるのではないかと思う。ここ数年で行っていくのは復興のプロトタイプとしての活動であっても、それを全世界の災害や紛争の後の復興を支援するためのものへと発展させることによって、継続的な、より価値のある活動へとかわる。